

「学校は勉強するところじゃない！」

20年前、ある生徒から「学校は勉強するところじゃない」と言われた。いわゆる問題行動が多く、成績不振で学校を去った生徒からだ。「それじゃあ、何するところ？」という私の問いに、彼女は「友達をつくる場所」と言い出した。それに対して私は説教臭い正論を述べ、深く耳を傾けることができなかったことを覚えている。学校は主に「学問を学ぶところ」ではあるが、「授業だけじゃない」。そんな当たり前のことを当時の私は強く意識できていなかったように思う。

あれから20年

コロナ禍で当たり前の学校生活を送ることができなくなった今、「学校は授業だけじゃない」「勉強ばかりじゃない」ということが身にしみてわかった。学校閉鎖、分散登校、部活動をはじめ様々な活動の制限、行事や大会の中止など未経験な異常事態が続く中、「学校とは何か」を改めて問い直す機会にしなければと痛感している。しかし、学校現場では国や県教委の指示通りに動くことや感染防止対策の打ち合わせと検温・消毒作業の繰り返し。ただでさえ、多忙化解消が喫緊の課題であるのに輪をかけて雑務に忙殺されている。また、感染者を出してはならぬというプレッシャーと先の見えない不安により疲弊している。

推進されるオンライン学習

「学校とは何か」を問い直すどころか、新しい取り組みといえば、オンライン学習やリモート教育のあり方が推進されるばかりだ。オンライン学習そのものはツールに過ぎず、便利なものや新しい技術の導入に反対するつもりはない。ただ、前提となる「学び」や「教



育」の観念があまりにも貧弱で、小手先の議論ばかりが進むことに危険を感じてしまう。(オンライン学習を導入するなら各学校でやるより、もっと合理的な方法がいくらでもある。)

議論は授業時間の確保ばかり。夏休みの短縮や行事のカット、土曜授業の復活など…。オンライン化も今までと大して変わらぬ授業を受けさせるツールとしかとらえていない。学校の主役は生徒といつつ、大人の都合だけで教育が語られているように思えてならない。授業が大事なことは当然のこと。しかし、授業だけに焦点を当てれば教育は商品化し、合理化が強調されるだろう。受験勉強やオンライン学習に特化してやってきた学習塾や民間企業の方が蓄積したノウハウがあり、AI（人工知能）の導入も加わって受験競争ではよい結果を出すに違いない。近年、公教育の市場化や民間企業の参入が激しくなることで起こる弊害が指摘されているにも関わらず、コロナ禍によって増々加速している。

生徒の不安がつる状況

受験を勝ち抜き、大企業に入ることを成功ととらえる今の社会では仕方のないことかもしれないが、新自由主義が横行し競争社会の中で進む生徒の序列化と「勝ち組」「負け組」といった価値観が支配する学校であってよいはずがない。様々な学校の問題は今に始まっ

たことではないが今までとは違う大きな変化と、それに伴う問題があることも確かだ。国と財界が主導して進める大きなうねりを止めることは容易ではない。正直、自らの無力さを感じてしまうこともある。また、現実的にはWi-Fi環境がどうの、教育格差がどうのという話題や「就職状況も厳しくなるから今から備えよ。競争に勝たねばならない」という話など生徒に対して注意・警告と指示ばかりで不安をあおる結果になっている。大人でも不安な状況なのだから生徒たちの不安とストレスは相当なものだろう。目標を失い、大きな喪失感を味わって苦しんでいる生徒たちも少なくない。

授業確保が最優先であるのに「頭髪・服装指導」に時間をかけ、相変わらず細々した生活指導はいかがなものか。特に1年生は学級開きも無く、クラスメイトもよくわからぬ状況下で1列に並び教師に囲まれ点検を受ける。この異常さと折り合いをつけることにも私自身限界を感じてしまう。もっと他にやらなければならないことがある。もっと語らなければならないことがあるはず。

生徒の声に「学校って何だ？」と問う

困難な状況でも「学校とは何か」ということを深く思考し、同僚と力を合わせながら自分にできることを一歩ずつやるしかない。そして、もっともっと生徒の声に耳を傾け話を聴き、寄り添い、精いっぱい聴き入れることが大切だと思う。休校中から自分に何ができるのか、生徒にどんな声をかけようかと考えてきたが……。考えるだけでなく、主役である生徒に聴こうと思い、授業担当の各クラスで様々なことを聞いてみた。やはり不安感を語る生徒が多く、感染する恐怖や人に感染させてしまう恐れを心配していた。そして「休校中、学校が始まったら何をしたかった？」という問いには、「授業を受けたかった」という返答よりも「友達と会いたかった」「友達と話したかった」「遊びたかった」という声が圧

倒的に多かった。また、「部活がしたい」や「学校行事がやりたい」というのも多い。「学校は何をすることで？」という問いには勿論「勉強」もあるが、「友達をつくる」「部活をする」「資格を取る」「学校行事」などが多数。「恋をする」「青春」という少数意見にはドッと笑い声が湧きおこる。「青春って？」と突っ込むとさらに話は盛り上がり面白かった。「人間関係を学ぶ」や「社会性を身につける」という意見もあり、こうした生徒の声が「学校とは何か」を表していると思う。

「人格の完成」とは！

教育基本法の第一条（教育の目的）に「人格の完成」があることをもっと深く考え受け止めなければならないと強く思う。「人格の完成」とは何か。受験や就職といった進路指導、ひいては人材育成を意味しているわけではあるまい。学校教育の本質は、すべての子どもに「自由」に生きられる力と「自由の相互承認」の態度を育むことで、教師の役割は「共同探究者」だということもこれまで学んできた中で大切なことだ。学問とは。学ぶとは。生きるとは。幸せとは何かを生徒と共に探究しながら、より良い学校をつくっていきたい。学校に生徒が集まるだけで「笑顔」が溢れる。そのことを大切にしたい。憂いよりも明日への希望を紡ぎながら。



〔玉村高校での授業風景〕記事の内容とは関係がありません。